

詩時評

第44回

今、アナキズムを
ほりおこす

松本衆司

「個人のバースナリティーであり、集団の人間関係であり、無意識の習慣をふくめての社会の伝統……そこから考えてゆくのではないと、人間の未来にとって重大な意味をもつようなものとしてアナキズムをほりおこすことは、できないだろう」(「方法としてのアナキズム」『身ぶりとしての抵抗・鶴見俊輔コレクション2』(河出書房新社)は七〇年に『展望』に発表された論文である。身の回りの小さな状況から「アナキズムをほりおこす」ことが重要であると鶴見は言う。アナキズムとは無論「権力による強制なしに人間がたがいに助けあって生きてゆくことを理想とする思想」である。そのアナキズムは私たちの生の根底にある。かつて私はその思いを込めて詩に「自由とは 着衣のまま 水平であ

ること」(「新しい伝記のために」より)と書いた。再び個人の生を脅かす権力主義に右傾化する社会を憂うる。

神谷毅詩集『祖母の鎮魂歌―読谷村・ガマヤーガーの惨劇』(コールサック社)を読む。その「あとがき」を引く。「……一九四四年十月十日当時五歳の私は全てを失った。十五歳の姉は早朝登校の弁当の準備をしていたという。日本軍の演習だと思った矢先アメリカ機部隊の航空母艦から一四〇〇機の飛行機が空に舞い、空撃で那覇市は九〇%が灰塵となり市民五万人が焼け出された。／一九四五年に村をあげて沖縄北部に避難した。三月二十九日には米軍の艦砲射撃で村に残っていた祖母や村人たちはヤーガーのガマで生き埋めとなった。一九五〇年三月二十五日、三十一柱の遺骨を収集しガマの上に「慰霊碑」を建て合祀された。沖縄戦で「捨て石」にされた沖縄は、四人に一人が犠牲に合った。本土防衛、国体護持の時間稼ぎ、無差別に犠牲に合った。本土人間が獣になり敵味方なく殺戮し合う戦争の実態である。／その後の一九四五―一九七二年の二十七年間はアメリカ合衆国の占領統治時代となり、沖縄人たちは数多くの辛い経験を経てようやく一九七二年日本に復帰した。／そして今、台湾有事として演習が強行、沖縄戦を生き延びた老人達が戦争

反対の声を上げている。……、この心をしで描き出された実態は凄絶な七一篇の叙事詩である。巻末に添えられた鈴木比佐雄の解説は次のように締めくくられている。「十・十空襲を体験し読谷村の米軍攻撃で祖母を亡くした神谷毅氏は、辺野古海上基地建設の資材を搬入する『キャンプシユワープ前』に座り込む人びとの支援を続け、その同志たちの思いを代弁する詩人だ。詩『邂逅 キャンプシユワープ前』の最後の三行「数億の殲滅の砲弾が俺達の命の軽さを／手の平に映して／君に語る」は、本土の『君に語る』と言いつ残す遺言のように、沖縄の抗いの叙事詩として語りかけてくるのだ。詩「痛哭」を引く。

掘らねばならなかった／家を建てる為に／掘らねばならなかった／忠魂碑を崇める為に／地下から未だ白骨が／砲弾を抱いたまま／掘り出される／／住居を構える為に／掘らねばならぬ／七十数年雑木は／朽ちぬ兵士の骨を捕まえて／抱き上げるように／包み込む／／眠りから覚めたいのだ／塊根は死者の口を埋に／収骨の終焉を告げるのか／塹壕の底から哭く骨の音が／夢の中で息を始める

あつてはならない無差別空襲は空爆と名前を変えて今も愚かな為政者たちの命令で繰り返

返されている。そして、その加害者たちはほとんどが神の教への敬虔な信徒たちのはずである。神谷さんはロマン・ロランの言葉を引く。「真理への愛のみが我々を決して裏切ることはない唯一の愛である」。

白取範子詩集『月光が降り注ぐテラス』（土曜美術社出版販売）を読む。「嬰ハ短調エチュード」を引く。

ルペライトの石を手に／夜が追憶に紅く染まる／左手はチェロを鳴らし／音が話しかける／／ぼんやりした旋律が渦を巻く／薄明かりの部屋／右手は応える／フルートの音域で応える／満天の星々が奏でる夜曲／シヨパンが愛したチェロ／低い音のなかに言葉がある／／右手は歌う／高い和音を拾い集め／声を紡ぎたくて夜の星に願う／星々は無い降り音を編む／星降る夜／／語り合うふたつの声／耳を傾ける宝石の砂や小石／色を持つトルマリン／わたしを染める

詩の世界では一括りにメタファー（隠喩・暗喩）と言うが、そこには喩喩も象徴も含まれてある。そう書くのは、この詩のメタファーの見事さを持ったからである。タイトルに誘われた詩の情景は上質なチェロの音に包ま

れた星降る夜の部屋の静かな煌めきと佇まいである。そしてその隠喩のエチュードの夜のペールを一枚剥がすと、得も言えぬ浪漫的エロスが映し出される。詩の醍醐味である。

横尾憲孝詩集『小児科医のためのレクイエム』（土曜美術社出版販売）を読む。「甘い匂いを拾う」を引く。

甘い匂いが診察室に広がる／子どもが食べこぼした／ビスケットのかげらが／部屋いっぱいに広がっている／／ビスケットのかげらが／散らばった診察室を眺めている／親のしつけが悪いとか／親自身がしつけられていないとか／そんなことはどうでも良くて／私を包み込んで甘い匂いの正体が／子どもの食べこぼした／ビスケットのかげらであることの方が／よっぽど重要だった／／生まれながらに／人間は不平等だ／／年金生活の祖母に連れられて／診察室で／ビスケットを食べこぼしている子がいる／ザラザラの肌でも／病院には連れてきてもらえず／かゆい肌をかきむしっている子がいる／／ビスケットはおいしかっただろうか／それ以上言葉にするに嘘になりそうで／ぐっと言葉を飲み込む／／そしてひとり 甘い匂いを拾う

この詩集は小児科医として懸命の医療を施しながらも救えなかった幼い命への鎮魂の書であり、そのぎりぎりの医療の現実のなかで鬱病を発症した医師の回復までの記録でもある。そして、生まれてきた子の誰もが新しい命を輝かせて健やかに成長することを願っているが、そうならない現実の小児科医である詩人としての叫びを込めた一冊であるのだ。

青木由弥子詩集『ことり組の午後』（ジョバンニ書房）を読む。「たぶの木の樹冠に、幾千万の光が宿る日に」を引く。

夏がことのほか好きだったというあなたが／暴風の夜、部屋の奥に居住まいを正して／稲光の照らし出すもう一つのこの世に／見ていたもの／血の色の薔薇の花びらを／穿ち貫通する雨粒／葉を削がれ未熟な身を挽がれ／老松のようなねじくれた蔓を／光にさらされていた葡萄／／高校生の時、淋しさにふるえながら／身も心もしめやかに濡らす春雨を／ことのほか乞うていましたね／憧れの人は遥か遠く／姉と慕うあのひとの白い手は／蒼い血を透かせて艶を失い／攻め寄せてくる実体を持った死を／陽を閉ざす黒雲よりも確かに／あなたは／視た／／古人の調べに哲学の言葉に／白熱する精神／燃え落ちる皮膜が剥がれ／現れる屹立

／打てば砕けるもろさで／空を覆う黒雲の
／さかまく渦を突き通し／すべてを純白に
／輝き尽くす／輝き渡る太陽／——あるいは
／輝くことを願いつつ／地に倒れ土に馴染み
／雨に崩れていく我が身を求めている

詩集は三つの章に分かれている。第三章
「めぐりあう朝」にこの詩はある。「たぶの
木」は大木となり、古来、山の神や祖霊の依
代となり祀られてきた。いのちに向き合う自
我は純粹であるが故に実存のありかを求め、
精神はエロスの極限に彷徨う。その夢想的葛
藤を経て、人は自らの創造と生きる営みの過
酷さと尊さを知る。この鮮やかなタイトルの
詩はまさにその一シーンでもある。

森水陽一郎詩集『孤牛』（ふらんす堂）を
読む。「孤牛」を引く。

村ばなれの緑紙は、切手もなく遅達で届く
／十年後の自分から、百年後の墓標から
／身支度を整えると、僕たちは城別れの岐
路に立つ／道をはさんで隣接する、自衛隊
の駐屯地と競馬場／競馬組は、アラブ馬の
厩舎の掃除と、ダート行軍一周1200メ
ートルを反時計回りに、昼夜なく／前のめ
りで砂を噛めば、背囊の梅むすびを頬張り
／かかとをすり減らして、骨うずめの覚悟

を育てる／／駐屯組は、村ばなれに備えて、
空の小銃が支給され／官給の緑毛布に寝か
せて、鉄工ヤスリをかけていく／手を真っ
黒にして、角を落とす、照門の穴をほどこ
／銃口をいじめ、弾倉に穴をあけ、引き金
を輪に戻す／小銃は三キロ半の赤ん坊、押
名をとかれた無垢の鉄／／鉄の削り粉は、
乳鉢ですられ、膠をまぜて墨泥とし／一枚
かぎりの緑紙に、決意の心得を指筆で走ら
せる／刻は問わない、指図も咳払いもなく、
風生まれを待つ／軍人勅諭ならぬ風人蝶遊
に、石頭がほどこれるまで／／人を試
さず 慈を惜しまず／才を妬まず 火を絶
やさず／ 牛は急がず 立ち止まらず
／誰にもうなずきを求めず、緑紙は畳まれ、
ふところに／孤牛と題した、始まりの指筆
が、明日の自分を指差し／僕たちは翡翠色
のまなざしで、白鷺に後ろ手を振る

詩集を紐解けるものがあろうか、とタイト
ル詩をゆつくり書き写す。城、競馬場、駐屯
地、その風景は詩人の生まれ故郷姫路であろ
うか。「孤牛」が「緑紙」が「小銃」が何か、
描かれた世界は容易に見えないが、この詩篇
には決意した孤独な暗殺者のような緊張感が
言いようもなく漲っている。

谷町蛸蠟詩集『太陽（と私の位置）』（草原

詩社）を読む。「軍艦アパート」の「Ⅱ」を
引く。

通天閣の近くのアパートは／トンネルのよ
うな入口をくぐると別世界のように現れる。
／「ワープ」／／五歳の私は密かにそう眩
き、お父さんとお母さんの手を握る。／神
社もある。お好み焼き屋もある。植木鉢も
ある。なんでもある。／「おばあちゃんそ
っくりやねえ」／見知らぬおばあさんが顔を
近づけて話しかけてくる。／びっくりして
お父さんの後ろに隠れる。／二階にある部
屋の玄関には靴がいつぱい。／左側の台所
でおばあちゃんがお茶を用意している。／
右側の部屋でおいちゃんが扇子を片手に
碁石を並べている。／畳とワンカップ酒と
夏の匂い。／おいちゃんは五歳の私を
「さん」づけで呼ぶ。／背筋がぴんと伸び
る。／玄関先に近所の人々が来ては、立ち話
をして帰っていく。／／賑やかで混沌とし
た日常が、その一帯に確かに存在した。／
／きれいに建て替えられて十五階建てにな
った公営住宅は／地面がとおく、静かで、
人と人が、人とものが混ざり合わない。／
おじいちゃんはそれでも毎日碁盤に向かい、
おばあちゃんは癌で死んだ。／／ひやっと
したトンネルを抜けると広がる古い建物
が／小さな神社が、商店が、植木鉢が、色と

りどりの洗濯物が／お節介でやかましい人々が／あの夏、確かにあの場所に存在したことを／この世界の至るところに存在したことを／もう誰も覚えていないのだろうか。

小欄第四三回前文で吉本隆明『夕ぐれと夜との独白』の「……生れ、婚姻し、子を生み育て、老いた無数のひとたちを畏れよう。あのひとたちの貧しい食卓。暗い信仰。生活や嫉妬やの争ひ。呑気な息子の鼻歌……。」そんな夕ぐれにどうか幸ひがあつてくれるように……」を引き、これは私たちの守るべき暮らした、と書いた。まさに谷町さんの詩に重なる。それは世間なのだ。世間とは巡る季節に生きる愛おしい人肌の情景なのだ。

宮内喜美子詩集『追悼の光を抱く女』（思潮社）を読む。「夢の国の風の粒子が」を引く。

握つても／にぎれない／爪が　てのひらの／頭脳線にくいこんで／つきやぶつてしまふほど／うらがえつてしまふほど／たしかめられない／しびれている／ぼんやり明るい／黄泉の色を帯びた／夜のかたまり／／たしかに掴む／すりぬけてゆく／／わたしが紡ぎだしたバリアーかしら／いつもまとっているのに／気づかないでいる／それと

も／空气中からこの皮膚に／磁石に牽かれるようにあつまつてきた／透明なやわらかい砂鉄たち……／／いえ／夢の国の風の粒子が／汗腺から　にじみだしたので／わたしという輪郭の外側に／オーラのように／／思いだそう／ほの明るい回路をさかのぼつて／あの国のことを／わたしがそこから来た／ひかりがのろく／ゆつくりとあふれてゆく／肉とのさかいがわからなくなるところ／／にぎつてみる／てのひらの／水ではちきれんばかりの細胞群／指紋や手相がぐにやりといひ／どこかにつきぬけて／指先だけ／消える

暮らしの中の小さなしぐさで気付くことがある。生きるとは、わたしを生きるとは何なのか。この詩では「わたし」を考察する。目に見えるものだけが「わたし」ではない。わたしという存在の醸し出す「わたし」らしさ、「わたし」であること、その不思議さをまるで神と対話する「ルオー」（アトガキ）の人物画のように見事に描き出した詩だ。

草野理恵子詩集『手の紐（人体詩Ⅰ）』を読む。「手」の描写やしぐさで繋がる小さな物語のような詩が三三篇、タイトルはいずれも漢字一字、しかも「人体詩」という副題、いろいろな手の込んだ仕掛けがありそうだが、

「口」を引く。

二本の長い骨の間から星を見た／多分あの星は地球だ／僕は　私は　腕の皮がはがれ中が見えていた／手の甲の間に風が通った／痛いつてどんなのかな？／習ったかな？／習った気がする　一度は／そのあと忘れた　多分／私は　僕は　痛みがわからない／もう地球は青い星ではなくなった／それ／もどうかわからない／色の識別ができなくなった／ただかもしれない／／二本の長い骨は白だ／それは絶対に白だ／あなたたちには白く眠ってほしい／愛する生き物たちの毛が毳のように集まり／投げ出されている灰色の星が見える／／はまなす／最後の音だけ口をすぼめる／その口の形を僕は　私は　時々／長い骨に口を寄せて／はまなす／何かわからない／何かわからない完璧なもの／きつとずっと／はまなす

他の詩篇と同様にこの詩も奇抜な発想とシユールな雰囲気が漂う。透明で痛みも色もない無機的な情景、あらゆることがAIに支配されるかのような近未来的なシーンである。だが、その中で「僕は　私は」まるでアダムとイブのように「骨」をさらしながらも、愛の心を見失わず互いの「口」を寄せる。